

「ボールを受ける」という。

この表現は正しくないと思ふ。たとえば捕手の場合、このポジションは試合でも花やかな動きをすることは滅多にない。大きなファウル・フライを、バックネットぎりぎりで、ミットにおさめるようなときが例外といえたい。動く、というよりむしろじつと耐えて、チームのかなめの位置を守り通す、という役割なのだ。

試合は投手と捕手を軸にして動く。捕手は投手からの投球をがっちりとりえねばならぬ。そのこと一つがまことに簡単なようで、なかなか至難のわざなのだ。

むかしと違って、直球とカーブだけではない。ボールは生きもののように、投手と捕手の間18メートル余をかける。フォークボールなどは、上下はもちろん左右にも複雑で微妙な動きをしながら、つつ走る。

「スポツ」と、また「ボン」とミットにおさまらず、捕手の胸や手に当ることはしばしばだ。単に球の飛んでくるところ、落ちてくるところで構えて「受ける」のではない。

あくまで「捕える」のだ。生きてはねまわる球を、細心のわざと力で、呼吸を整えて「とり押える」のだ。

いわゆる かつこいいかとり方をねらつて、片手でとつてみたり、故意に派手なプレーをする選手は、私はとらない。

プロの場合は話は別だ。高校野球は決してショーではない。ボールは手や腕だけでなくからだ全部で、全神経を使つてあくまで「食いついて行く」ものなのだ。

それをファイトと呼ぶ。審判の判定に文句をつけたり、野手にぶつかるといふような走塁をするのは、ファイトとは縁遠いものだ。

もう一度——「ボールは受けるものではない。捕えるものだ」